

故郷の 明日香はあれど

あをによし 奈良の明日香を 見らくし良しも

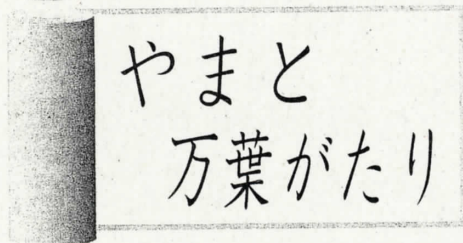
大伴坂上郎女 (巻六・九九二)

の歌を残しています。平城京に居住していた彼女にとっては、「奈良の明日香」が慣れ親しんだ寺院だったようです。

744(天平16)年11月13日、紫香樂宮(滋賀県甲賀市)近くに造営された甲賀寺に、廬舎那仏像の体骨柱を建てたと『続日本紀』に記されています。聖武天皇の発願によって大仏鑄造が開始されたことを意味していました。

造る必要がありますが、その芯となる木組みの柱を体骨柱とい、それを建てる儀式に、聖武天皇はじめ四大寺の僧侶たちが参列したとあります。

廬舎那仏とは大乗仏教の毘盧遮那仏のことです。いま東大寺の大仏さまとして親しまれている毘盧遮那仏像は、当初の計画では甲賀寺



に建立される予定であったことがわかりました。このときの四大寺とは、大安寺・薬師寺・元興寺・興福寺のことでした。

元興寺は、もとは明日香にあった寺でした。蘇我馬子が建立した日本最古の本格的な教寺院で、『日本書紀』では「法興寺」「元興寺」「飛鳥寺」などと

表記されています。法興も「元興」も、日本で最初に仏法が興隆した寺院であったことをあらわす名称でした。710年の平城京遷都に伴い平城京内に移転しましたが、明日香の法興寺も廃止はされず残りました。この歌に詠まれた「故郷の明日香」とは、明日香の元興寺のことであると考えられます。

ひとつに数えられた元興寺は、世界遺産「古都奈良の文化財」の構成資産となっており、かつての境内地は「ならまち」として現在も親しまれています。(万葉文化館・井上さやか)

《訳》古京となった明日香もよいけれど、青丹よき奈良の明日香を見るのもよいことよ。

